

## 巻頭言

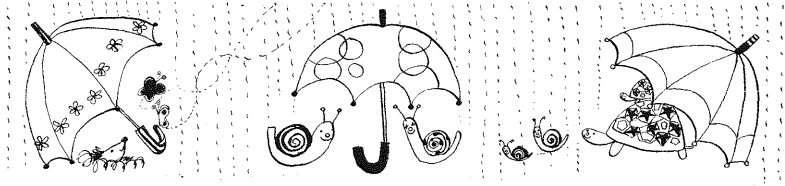
# まけるもんか！

諏訪 きぬ

子どもには優しいところもありますが、その競争心はなかなかのものですよ。ここである一歳四か月のAに、「はい、おみやげあげる。ひよこちゃん」といたわりを見せるH子が、突然「あげるのやーめた」と取り上げたりします。ふざけているのではない。あげることに、取り上げることにも、三歳七か月のH子は真剣なのです。まわりの大人がH子に向けるまなざしや気持ちを、敏感にくみ取って対応してあります。「H子ちゃんはお姉さんになったのね」と褒めようものなら、早速、「いいこ、いいこ」と、Aの頭をなでにいたりもします。

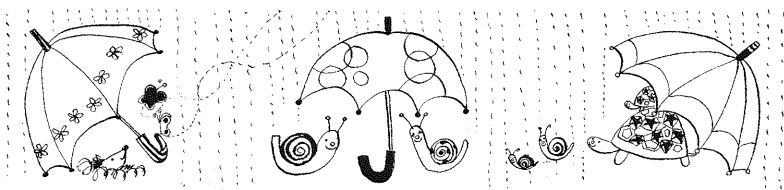
わたしのケイタイは鳴らない！

今の子どもは置き電話に興味を示しません。生まれて見る風景は、携帯電話



で話をする大人の姿だからです。AもH子も、母親から譲り受けた古いケイタイを大事に持ち歩いています。Aに「もしもし」と呼びかけると、早速ケイタイを取り出して、折り畳みであるケイタイを開いて「チエ、チエチエ」と首を振りながら懸命に応答する姿は愛らしい。「それではまたね。バイバイ」と言うのと、空いた手をクルクル回して「バイバイ」し、しっかりとケイタイを折り畳みます。ケイタイをしっかりと道具的に扱うことを、もうマスターしているのです。ケイタイの機能はストップさせてありますが、Aのケイタイの液晶画面には、かわいいシールが幾つも貼ってあって、さながら大人用ケイタイのトツブ画面のように作ってあります。「本物らしく…」との母親の配慮なのでしょう。それがH子にはうらやましいのです。

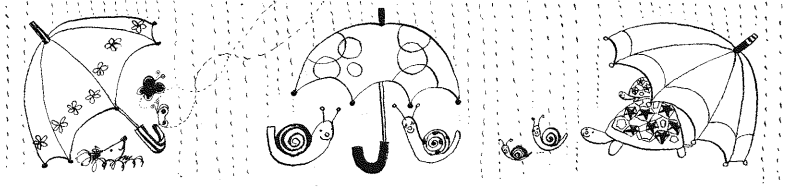
「H子のケイタイはね 何も出ないの」とH子はつぶやきます。あれこれ押してみますが画面には何も出てきません。「これはね、出ないケイタイなの」と、自分を納得させるように言って、H子はケイタイを折り畳みます。Aの画面がシールとは気づいてないH子には、明らかに自分のケイタイの機能が劣っていると思われるでしょう。突然Aの方から「ルルル…」とケイタイの音が鳴り響きました。H子にとっては一大事。「画面だけでもまけているのに、音まで出るなんて！」との思いが、瞬時にH子の胸中を駆け巡ったに違いありません。



せん。H子は自分のケイタイを掴むとAの近くにつかつかと進んで行きました。H子はじつとAを見据えて、開口一番「まけるもんか！」と大声を發したのです。「まっけるもんかー！」「まけるもんかっ！」とH子のまけるもんかコールが響いて、周囲の大人たちが、一斉にH子を注視することになりました。気恥ずかしくなったH子はそそくさと母親のひざに戻って、なおも小声でつぶやきます。「まっけるもんかー」「まっけるもんかー」。"もんかー"を一段と小声でささやくようにつぶやくH子の様子は、悔しさを自分で始末しているようでもありました。子どもにとっては、他人ひとより明らかに劣ったものをもつことは、これほどまでに屈辱的なことなのです。

### 保育園は「まけるもんか」世界？

H子の「まけるもんか」には後日談があります。養護学校の教師をしている父親が言うには、H子のこうした負けん気は、保育園では日常茶飯事なのだそうです。「だってさあ、一歳やそこらの小さいうちから保育園に行つてさ、引つ込んでいたら置いていかれちゃうじゃない。負けるもんかと言わないかもしれんけど、他児ひとを押しおしのけ自分を出していかんと、やっていけんじゃない」というのが父親の弁です。



現代は「人とかわる力」が育ちにくい時代といわれています。また、「実体験の乏しさ」も問題にされています。しかし、そのどちらの力も日常生活の一コマひとコマを通して培われるものです。夫婦同業、共に時間を取り合うような厳しい共働き生活と、競争心をいやが上にも発揮せねばならない保育園生活を通して自己形成していくH子。一方Aのママは、かつおだしを引いて煮物を作り、栄養バランスを考えて食事を用意し、清潔な環境でゆつたり子育てをしているセレブ好み専業主婦です。一つひとつの事柄に、Aの意思を尊重して対応していく母親の姿からは、Aが「まけるもんか」を発する姿は想像しがたいものです。

幼稚園児175万人、保育園児200万人、ついに保育園が幼稚園を量的に陵駕してしまいました。幼稚園での預かり保育も広がっており、長期間長時間、園で生活する子どもたちが急増しています。そもそも、集団生活で子ども同士が切磋琢磨する条件を有する幼稚園・保育園には、今こそ、保育者がゆつたりと子どもと向き合い、子どもにやさしみを届け、子ども同士が心地よく調和できる生活をつくり出すことに意を用いてほしいと願います。「まけるもんか」精神が大きく花開くためにも…。

(明星大学)